

幼稚園児の人間関係と対人行動

池山和子

Patterns of Social Interaction and Social Behavior
in Nursery School Children

Kazuko IKEYAMA

I はじめに

対人関係の発達について、Tinbergen¹⁾は「対人関係の広がりや早期の母子愛着関係に始まり、それが拡大されて他の人々との関係の形成につながっていき、その人々から子どもは多くのことを学んでいく」と述べている。早期の母子愛着関係について田口²⁾は、対人的社会的行動の基礎は生後最初の2年間で相当程度のものでできあがるが、この間の母子のやりとりとしては、①子供の側の①泣く、ぐずる、②笑う、③じっと顔を見つめる、④声を出す、⑤移動する、といった行動を起点として、⑥母親の側の行動の仕方としては、大部分が①子供を安心させ、喜ばせることを狙いとして、②子供のペースにあわせて、③子供がこわがったりいやがったりする様子が少しでもみられればただちにやり方を変えると風は無理をしないで、④子供を喜ばせるだけでなく母親自身が楽しみながら自然にってしまう形で、⑤将来のことを考えてそのためにするといった意図を持たずに、する行動によって成り立っているものであると描写している。

子供は2歳を過ぎるころから徐々に家庭外の人間関係にふれ始める。就学年齢に至るまでに子供自身の自発的な動因として同年齢の子供との関わりを欲するようになるが、同年齢の子供との間に展開される人間関係は乳児期の母子愛着関係とはかなり異なっているものと考えられる。

本報告は、就学前の幼児が同年齢集団である幼稚園の中でどのような人間関係を展開しているか、また、どのような対人的行動をとっているか、その行動がどのように機能しているか、について幼稚園において得られた観察記録によって考察したものである。

II 方法

- (1) 観察記録は、昭和50年、51年、52年各前期（4月中旬～7月初め）水曜日午前中に鹿児島市内国立幼稚園で行った観察によって得たものである。記録の中から子供どおしの関わり方の記録されている場面をとりあげた。記録は全て学生によってなされたものである。表1に年度別観察者数と考察に用いた観察日数および各人によって得られた場面数を示す。記録は逸話記録風にとられ

表1 観察記録の記録者と日数と各人によって得られた場面数

年 度	観察の 全日数	観察者 の数	観 察 者												
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
年	日	名													
50	11	11	0	5	5	3	4	4	3	2	2	3	6		
51	10	6	7	3	6	0	7	4	—	—	—	—	—		
52	13	4	7	8	6	4	—	—	—	—	—	—	—		

細かな点で様式が統一されていない。同じ場面を2人の観察者がそれぞれ記録している場合があるが、記録にどの事実をどの事実をすくいあげたかは観察者によって違いがみられた。

- (2) 逸話記録は観察者の主観によって事実が選択されて記録されるものである。こうした選択は、現段階では、保育者が子供と関わる時の眼とほぼ等しいものと考えて考察することにした。保育者は子供と関わる場合、目の前の子供の行動を捉え、その行動をその時その周りで起こっていたことや時間的な経過も考えに入れた上で解釈し、その解釈に基づいて子供に対応してゆかなければならない。保育者の解釈が正しかったかどうかは、保育者の対応に対する子供の次の反応によって確かめられる。いわば子供とのやりとりの中で子供に関する仮説の組み立て、検証、更新を連続的に行っているともいえる。解釈を下すに当って捉えた子供の行動や周りの出来事は、保育者としてその場に起こっていることすべてを細部に至るまで細かくもれなく把握しているのではない。意識はしていない部分も含めて人はどんな場合も事実を選択的に把握するものであることが知られている³⁾。この際の選択の仕方が保育者としてあまり大きく歪んでいけば当然解釈にも歪みが生じ、子供との関係はぎくしゃくしたものになり保育の流れも滞るものと考えられる。ここで用いた観察記録は“理想的な”保育者による把握とどの程度距離があるのかということも現在ではわからない。このような事実選択の歪みは、時間を要する方法ではあるが、1つには数多くの観察者による数多くの観察記録を積み重ねること、また1つは実際に子供に関わる際にどの程度役立ち得るかによって、修正・検証していくことが可能なのではないかと考える。

III 結果と考察

時間的に連続している記録は1場面と数え、子供間の関わり方の記録されている場面100場面を得た。この100場面を人間関係という観点から、(1)仲間関係ができあがる(仲間関係の維持や仲間関係の確認を含む)方向で展開がみられた場面、(2)仲間関係を断ち切る方向で展開がみられた場面、(3)子供どおしの間に対立が生じ、調整が必要になった場面、(4)安定した仲間関係の上に活動が展開されている場面、(5)周辺的な行動の中での対人行動のみられる場面、の5つに分類した。また少し意味合いが異なるが、(6)「泣くこと」がみられた場面を1つの分類項目としてたてた。

* 100場面について1から100まで通し番号を付した。

** 子供の符号は場面ごとに全く別である。

(1) 仲間づくりの場面

基本的には同じ園、同じクラスの一員であるという意識はもっているが、その時々において同じ活動を共にする小さな仲間関係がいくつかできあがる。こうした、仲間関係がつくられようとした場面で36場面みられた。一つのことばかけですぐできあがる場面もあるが、例としてかなりの時間がかかっている場面を示す。

場面32 砂場ではスモックを早く着た子どもたちがスコップを持ったりしてもう何か遊びを始めていた。A君は砂場に遅くついた。そしていろいろあたりを見回して友だち（B君）を見つけ、友だちの方へ行き、友だちが砂を盛り上げ、山をつくり、トンネルを掘り、水を流しているのをそばから見ていた。そして何か取りに行くが結局何もなく素手でその場にまた帰ってきた。そして先程と同じようにB君が掘ったりかためたりしているのを手をくたそうとせず見ていた。しかし徐々に手を出して友達が掘った後を掘ったり、友達がかためた後をかためたりした。A君、B君、C子ちゃんできつっていた山をB君がこわし、A君に「おい〇〇（A君の名前）おっきいのをまたつくってけね」と言ってB君は向こうの山の手伝いをしに行った。A君はB君に「わかった」と言った。A君はC子ちゃんと話をせず（途中C子ちゃんが「あんたの名まえは何ていうの」と尋ねたけれどA君は答えなかった）山をつくり始めた。A君はC子ちゃんと小さな山をつくりトンネルを掘り始め、まだそのトンネルが完全にあかないうちにジョロを持った男の子（D君）がやってきて山の通路に水を入れ、トンネルが完全に通じたが水の入れすぎと山が小さかったために山がこわれてしまった。A君はD君をみつめそしてB君のところへ行き、D君を指さして「〇〇（Bの名前）ちゃん、このひとがこわしたよ」とB君に言う。B君はD君に「もう水をいるんなよ」と言いその後A君も「もうみずをいるんなよ」と言う。そしてまたA君、B君、C子ちゃんできつ山をつくり始める。山ができトンネルが開通するとB君はA君に「〇〇、水くみ当番！」と言うとA君は「わかった」と言ってジョロを持って水をくみに行く。A君が水をくんできて流し、トンネルの通路が他の山の通路と通じそうになると他の山の男の子（E君）が「つづけたくない」とB君に強く言う。B君は「どうして」と言い2人ともにらめっこみたいになる。E君がA君とB君の山の通路を少しこわしB君が「なおせ」と言い、E君は通路と通路が通じあわないように、A君たちの通路を曲げて直し、それでいがみあいが終る。A君たちの隣りの方で女の子3人が一生懸命穴を掘り水を流していたが、この女の子たちの通路がA君たちの領域まで近づいてきたのでA君たちと女の子たちの言い争いが始まる。B君「おれたちのりょういきにはいるな」と言うとなんの子たちが「あんたたちのりょういきじゃないよ」というように。この間A君は一言もしゃべらなかつた。女の子たちはB君の強い態度におされてA君たちの領域を侵害しないようにまた女の子3人で遊び始めた。B君もA君やC子ちゃんと遊び始めA君が「ともだちじゃないもんね」とB君にいう。（50・6・8）

●仲間関係作り、仲間関係の確かめとして機能したと思われる行動を36場面の記録から挙げる。

① 友達が活動しているそばへ行つてその活動を眺める。

(1) 友達の活動に関して質問する、(2)ことばをかわす、(3)目があつてにつこりする、といった行動が生ずると関係が一步前進したと感ぜられる。

② 友達と同じ行動をあとについてする。

③ ことばで仲間加わるよう誘う、加わりたいと頼む、仲間であるなしを言つてみる。

(1) 自分のしようとしていることを友達に届くところで宣言したり言つてみる、という行動がみられた。（軽い形と感ぜられたが、軽いだけ相手との関係に安定感があるとも考えられる）

1回のことばかけで相手が反応しなかつた場合、くり返しかけるが、(イ)次第に声が大きくなつ

た場合と、「～しよう」ということばから(ロ)「～してもいいよ」「～させてあげる」ということばに変わった場合があった。(ハ)「かたしてね」のあとに「水くみ当番するからね」とつけ加えた場合もあったが、これらは仲間入りしようと行動の強さを微妙に増していると思われる。

- ④ 友達の指示にさっそく従う。
- ⑤ 友達が終えるのを待っている。来るまで待っている。いるところまで戻る。
- ⑥ 道具、遊具、場所をさし出す、さし示す。
- ⑦ 手をつなぐ。
- ⑧ 自分の活動の場へ友達を連れてくる（連れていく）
- ⑨ 友達に軽く（身体的な）攻撃行動をする。

イ. 指でつつく、ロ. 「～のばか」と声をかける、ハ. つきとばす、ニ. 頭を軽く叩く、ホ. たおれかかる、ヘ. くすぐる

※1つの場面では同じ行動をくり返す。指でつつき、次は頭を叩いてみる、という形はみられなかった。

- ⑩ 同じ活動領域（近い場所）で同じ道具・玩具を使って同じ活動を（平行して）する。
- ①眺める、②同じ行動をあとについてする、場合は③ことばで誘ったり頼んだりした場合と比べて相手との間に心理的距離があるように感じられる。仲間入りしたい気持ちがありながら失敗した場面は5場面あった。その時の子供の行動としては○ことばで誘ったが反応がなかった。○頭を軽く叩いて逃げることをくり返したが相手が自分のしていることに夢中になっていて反応しなかった。○眺めていたがその後皆の活動している領域へ入っていったが、皆が他の場所へ移動するとり残された。○道具をさし出したが友達がその道具を使おうとしなかった、といったものであった。同じ玩具を持ってそれを同じ領域で使おうとして入っていった場合、他の場面では周辺人的な行動をとっていた子供がよく安定して活動している場面がみられた。

(2) 仲間関係が断ち切られた場面

仲間作りをしようとして反応が得られなかったのではなく、仲間関係をこわす方向に動いた行動がみられた場面である。14場面にみられた。

場面41 年長組の教室のはしのテラスで7人くらいの女の子たちが集まっている。楽しそうではない。7人の中の1人がきく「どうしたの」「Aちゃんがあそばないっていうの」沈黙が続く。6人になる。8人になる。1人遊びたくない子がぬける。そして年少組の教室の方に行く。くつをはきかえる。近くにいた男の子をくつで叩く。女の子と話す。くつをはきおえ立ちあがり教室へ行く。笑っている。男の子をしきりに叩く（おもしろがって叩いている）このA子がぬけたあと7人のグループはそれぞればらばらになる。(50・6・18)

場面80 数人の女の子があそんでいる。仲間に入れてほしいらしい女の子がそばにいても無視している。「かたして」とその女の子が言ったが「あのこのいるところにはいかない方が良くわ」とリーダーらしい女の子が答えて走ってそばをはなれていった。(52・5・18)

仲間関係を切ってしまう効果を持ったと思われる行動として次のようなものがあった。

- ① 友達のいる場所、ちょうど来ようとしている場所から離れる。

② 友達の言動をことばで拒否、嘲笑する。

「だめ」ということばだけでなく(i)「あとからきたくせに」ということばがつけ加えられた場合があった。拒否の程度がいくらか弱くなったと感じられる。

そのつもりでなかったのに起きたこと（水を流して山が崩れてしまった）を強く非難された場合、その行動を止めて仲間としていつづけた子供と、仲間関係から抜けた子供が同一場面でみられた。仲間から抜けた子供の方がグループ内の立場は弱かった。

③ 友達が来ると黙り込む。

④ 友達がいやがることをする。していることの邪魔をする。

意図としては、その場や遊具・玩具から友達を立ち退かせる狙いでなされ、対人的な関係そのものを拒否することは感じられないが、結果的には関係が切られることになる。

- 行動が意図した効果を持たなかった場面は2場面あった。「だめ」と言ったが結局一緒に遊ぶことになった。○自分が乗っていた車に自分を押しつけて乗ってしまった車を、友達を降ろすつもりで勢いよく押して走らせたが、2人とも楽しくなって結局一緒に遊んだ。

(3) 対立的な状況が生じて調整が必要になった場面

仲間関係にあったかなかったかは関わりなく、したいことがかちあったり、一方がしたいことを一方がさせたくなかったり、といったことが生ずる。一方がはっきり自己主張しないので、はっきりした対立状況にはならないで済んでしまうこともある。はっきりと対立した空気があった場面は25場面（同じ場面の記録が2つあり23場面）あった。

場面85 お馬さん、年少組の女の子3人やってくる。1人余る。「私から先に乗るからね」「いや」「じゃ私が後ろにのるからあなたは前にのって」「いや」1人あぶれる。しかしあとで交替（52・6・1）

場面96 年長組の男の子たち約10名は砂場で遊んでいる。ホースからの水を使って池を作ったり、橋を作ったり堤防を作っている。各人思い思いに遊んでいたが、次第に池の規模が大きくなると遊べる土地が狭くなってきた。このころより小さなぶつかり合いが始まった。それを解消するために男の子1人が「○○君の言う通りにしようよ、○○君がこの遊びを言いだしたんだから」という提案をし、みんな納得した。ところが○○君は「橋も作っちゃだめ、堤防も作っちゃだめ」というばかりでリーダーの役割を務められなかった。

その時突然男の子2人が口論を始めた。1人の子が「B君がスコップで僕の頭を打ったんだよ」と激しい口調で顔を緊張させて抗議している。それに対してB君は「うったんじゃないよお、知らなかったんだヨ」と言った。しかしまわりのみんなは口々に「知っててうったんだよ」「B君はすぐうそをつくんだ」「うそつき」と非難したのでB君は泣いてみたり先生に訴えたりした。（52・7・6）

対立的な状況を生み出し、持続させたと思われたのは子供たちの次のような行動であった。

① 友達の考えやしようとしていることと対立することをことばで主張する。

主張の仕方の強さに種々の段階がある—イ、一回言ってみる、ロ、くり返し言い続ける、ニ、きつとなって言う、ホ、文句を言う、ヘ、悪口を言う、ホ、激しい口調で顔を緊張させて言う。

② 相手をじっと見つめる、にらみあう。

③ 相手の持っている物を取ろうとして引っぱる。

④ 身体的な攻撃をする（叩く、ける、つまむ）

- ⑤ 相手に属する物をこわす（砂場），ける。
- ⑥ 友達と一緒にしていたことを途中で止める，少し離れた場所に移動する，返事をしない，などふくれている行動。
- どの場面も①から始まり，②，③，④，⑥は①がエスカレートした形で生じていた。ふざけっこが本気で身体的な攻撃をしあうけんかになった場面が1場面あった。相手の物を相手の目の前で隠してにらみ合いになった場面があったが，この場合もふざけるつもりが対立場面になったと考えられる。各場面を調べてみると，対立が生ずる前から子供たちが多少ともいらいらしていたのではないかと考えられる場面が多い。時にはふざけっこの意図は全くなくて，相手の頭をジョロで叩いたがその子が全くとりあわなくて対立的な状況にならなかった場面もあった。
 - 相手をじっと見つめる，にらみあう場面の方が，お互いに物を取りあうだけの場面より対人的に対立感が強く感じられる。またどうしてそうした状態が生ずるのか今回の資料ではわからなかったが，回りの子供たちが一方の子供について一方の子供を同調して非難し，対立状況がますますエスカレートする場面がみられた。
 - 対立的状況が生ずるきっかけとなっていたのは次のような事柄であった。—A，遊具・玩具など物，場所や順番の取りあい。B，友達のしたことやしようとしていることが自分の考えと違っていた。C，自分自身や，自分に属する物に直接被害を受けた。D，子供たち全体に課せられている規則を1人が守っていない。
 - 対立が収まる方向の行動として，次のようなものがみられた。
- ① 調停案を出す
 - ② 先生に言いに行く（と言う）
 - ③ 一方が押し切る
 - ④ 一方又は双方が主張をひっこめる
 - ⑤ 文句を言って気を収める
 - ⑥ 謝る，言い訳する
- (4) 一定の安定した関係の上に成り立つ活動の中で，対人的やりとりが展開している場面
一定のレベルでの良い人間関係が成立していて，関係それ自体はプラスあるいはマイナスいずれの方向への変化をみせず，対人的関わりのある場面が49場面にみられた。

場面43 庭の隅でT君が土を掘り起こしている。すぐ横のブランコで遊んでいた女の子5人が「何しているの」と近寄ってきて尋ねる。T君「幼虫とりだよ」しばらく様子を見たあと5人はいっしょにその場を去る。スコップを持ったA君がいっしょに掘り始める。A君がスコップを置いて「ぼくがするからT君は掘ってね」と言いながら，土の表面の芝や草のはえた部分をはぎとってまくと土ばかりの部分が出てくる。T君は言われた通り新しい部分をせっせと掘っている。T君は小さなバケツに土を入れ片手に持っている。やがて出てくる幼虫のための家を準備している。（しばらくして女の子5人がそれぞれスコップやバケツを手にして戻ってきて幼虫とりに加わる。次々と2，3人，様子を見てはスコップとりに行きこのグループに加わる。10人くらいでかたまっ掘っている。男の子が2人程スコップの手を休めては表面の土をはぎとるのに精を出している。新し

い土が現れると2, 3人がそのあとを追うように掘り返していく。3, 4人が別の場所へ移って探している。突然男の子が「みつけた」と大きな声を出す。その場にいた子どもが集まってきてのぞきこむ。またせつせと掘り返す。T君は「B君は他にもみつけたでしょう。ほくにちょうだい」と頼む。B君はすぐに同意してT君にあげる。T君は幼虫の家に入れて軽く土をかぶせる。数人の子供が見にくる。「おおきいなー」、T君は大事そうに抱きかかえるようにしてにこにこ顔で教室の方へ行く。それについていくようにして2, 3人去る。B君とA君はまだ残っている。A「どこにいたの」B「ここにいたよ」と指さす。同じ場所を掘るけれどもみつかからない。お集まりの合図の後しばらくして腰をあげる。(50・7・2)

場面7 A「空色いりませんよ」B「はいはい」C「はいはい」と2人とも手を挙げている。A「じゃんけんしなさいよ」B, C「じゃんけんぽん、あいこでしょ…」C「かったかった」と言いAの筆をCがとりかき始める。

AとBその後口げんかを始める。Cの顔(額)に絵の具がついていた。A「えのぐがついてる、えのぐがついてる」C手でとろうとする。B「そんなことしたらかみの毛につくが」Dが見ていてCの上着のすそを持ち上げてそれで絵の具をふきとろうとした。届かない。今度は自分の上着で絵の具をとってやる。まだ落ちなかったのか、つばを手につけとってやる。(50・5・7)

- 場面43にみられるように、同じ場所で同じような道具を使って同じ活動を平行してすることがそのまま対人的関わりをもつことになっている場合がよくある。その中でまたさらにその活動を発展させるような言動がなされることもある。まず活動そのものを成り立たせる行動をすること自体が対人的関わりをもつことになった場面の活動を記録から挙げる。

- Ⓐ 鬼ごっこ, 基地ごっこ, テレビヒーローのつもりになって追いかけたり走ったりする
- Ⓑ 鶏, 兎を眺めたりふれたりしながら話, 議論する
- Ⓒ 虫(アリ)をつかまえる
- Ⓓ 木の葉つみ
- Ⓔ お絵画き
- Ⓕ 絵本をいっしょに見る
- Ⓖ すべり台で遊ぶ
- Ⓗ デランコにのって遊ぶ, 木馬にのって遊ぶ
- Ⓘ 回転グローブジャングルに乗って遊ぶ
- Ⓙ 乗って遊ぶ車に乗ったり押したりして遊ぶ
- Ⓚ 押して動かす自動車玩具を使って遊ぶ
- Ⓛ 線路を組みたてる汽車遊び
- Ⓜ ブロック遊び
- Ⓝ 積木遊び—積木の片づけ
- Ⓞ 砂場遊び—砂場の片づけ
- Ⓟ 水遊び
- Ⓠ 鉢に土を入れて種を植える
- Ⓡ 幼虫とり
- Ⓢ 紙ひこうきとばし, かざぐるま遊び(一斉保育で各々が作った物を動かして遊ぶ)

